

日本労働年鑑 戦後特集(第22集)

The Labour Year Book of Japan post war special ed.

第二篇 労働組合

第三章 労働組合運動

第六節 示威運動(つづき)

2、野坂参三歓迎国民大会

一九四六年一月廿六日

亡命十六年の生活を終えて共産党の国際的指導者「野坂参三氏」が帰国したのは廿一年一月十二日であつた。戦争中の支配勢力にとつて代るべき強力な人民戦線の樹立が要望されていた際だけに、氏の帰国を契機として戦線統一を達成すべしとする気運があふれた。

一月廿六日の野坂参三歓迎国民大会はこの気持をのせて開催された。かつては隣組、国防婦人会、警防団、在郷軍人の国民決起大会が重い空気の中に開催された日比谷公園大広場に数万の大衆が集つた。大会委員長に山川均、司会者に荒畑寒村両氏がきまり、放送局オーケストラの伴奏で「インターナショナル」を青年共産同盟合唱隊が高唱して大会は始つた。開会の辞で麻生重一氏は「国土を荒廃せしめ、人民を窮乏におとし入れた東條と終始軍国主義と闘い民主々義を建設しようとする野坂とどちらが愛国者だ」と叫び、次で山川均、荒畑寒村、大会副司会者島上善五郎、黒木重徳、社会党水谷長三郎、歓迎詩朗読薄田研二、婦人代表神近市子、朝鮮人団体代表金薫、復員兵士代表遠山景久、全日本映画従業員組合藤田進、その他細川嘉六、室伏高信の各氏が交々民主戦線達成の重大さと、氏の帰京の重大なる意義を強調した。尾崎行雄氏のメッセージ代読について、数万の拍手の中に野坂氏は壇上にたち、無能なる現内閣は退陣すべきであり、人民政府を樹立せねばならぬがそのためには民主勢力の結集が大事である、民主々義確立のための奮闘は愛国的行為であり、それ故に民主戦線は新たな愛国戦線であると力づよくのべた。(共産党の項参照)次いで起つた社会党片山委員長も、民主戦線結成には参加の用意ありと断乎のべれば万雷の拍手が送られた。重盛壽治、加藤勘十、徳田球一各氏の演説の後、荒畑寒村氏の閉会の辞で大会は終わつたが、約一万余の大衆は赤旗を先頭にデモに移り、黒木重徳氏ら代表は首相不在のため、石黒法制長官に一、食糧危機におとし入れた責任者幣原内閣の総辞職、一、板橋事件の被検挙者即時釈放、責任者藤沼警視總監の退官等の要求を手交した。

日本労働年鑑 第22集／戦後特集

発行 1949年8月15日

編著 大原社会問題研究所

発行所 第一出版

2000年2月1日公開開始

